
クレヨンしんちゃん 超次元！嵐を呼ぶ仮面ライダーディケイド

デネブキャンディー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クレヨンしんちゃん 超次元！嵐を呼ぶ仮面ライダーデイクイド

【Nコード】

N9571H

【作者名】

デネブキャンディー

【あらすじ】

クレヨンしんちゃんと仮面ライダーデイクイドが夢のクロスオーバー！
バー！！

ギャグあり、シリアスありのドタバタアクション！

しんのすけが、世界の破壊者デイクイドに！？

果たして、しんのすけは9つの世界を巡り、その瞳に何を見る？

悪夢（前書き）

まずは、前回私の不注意により、削除してしまったことを皆様に深くお詫び申し上げます。そしてトマトさん、ミカサさん、暖かい応援誠に感謝致します。それでは、新たに書き直した『クレヨンしんちゃん嵐を呼ぶ仮面ライダーデイクイド』を、お楽しみ下さい！

悪夢

私は荒野の真ん中で立っていた…

その荒野は恐ろしく静かで、風の吹く僅かな音しかしなかった…

私はなぜこんな所に立っているのかと、辺りを見回していた…

「ウオオオオオオオオオオッ！！！」

不意に何かの叫び声を聞き、その方角を見ると、遙か向こうから何かの大群が雄叫びをあげて迫って来る…

やがてそれは、はつきりと見えるほど近づいて来た…

それらは、全てヘルメットの様な仮面を被り、何かに戦いを挑んでいる様だった…

その光景を見ると、突如巨大な閃光が仮面の戦士達を襲い始めた…

たくさん仮面の戦士が何かに挑み、傷つき、倒れていった…

「ウワアアアアアッ！！！」

閃光が、戦士達を殲滅してゆく…

「グアアアアアッ!!」

確実に、その命を刈り取ってゆく…

「ギャアアアアアアアッ!!!」

閃光が直撃した仮面の戦士達は、次々と倒れていった…そして倒れた戦士は、二度と動かなかった…

目の前の地獄絵図に、私は自分が次第に恐怖を感じているのがわかった…

目の前で続く戦い…否、これはもう戦いではない…『破壊』…そう解釈することしかできない…その恐怖は、とても言葉では言い表わせない物であった…

そして、ついに戦いは終わり、また荒野の静けさが私を包んだ…しかし、たくさんの仮面の戦士が倒れている中、荒野にたった一人、凄まじい輝きを放つ仮面の戦士がいた…

その戦士の名は…

「……………ディケイド……………」

クレヨンしんちゃん嵐を呼ぶ仮面ライダーディケイド

ライダー大戦だゾ

みさえ

「……またあの夢……」

ここは埼玉県春日部市の野原家…

そこに住む主婦である野原みさえは、最近良く見る夢にうなされていた…

仮面の戦士が何かと戦い、そして最後に現れる戦士、『ディケイド』

…
この夢の所為で、大好きな昼寝も、楽しくなくなっていた…

みさえ

「一体何なのよ…あの夢は…それに、あのディケイドって言う戦士は…?」

言いながら、時計を見る…時刻は、四時半を過ぎている…

みさえ

「あ、もうこんな時間…そろそろしんのすけを迎えに行かないと…」

ひまわり

「たや!」

みさえ

「ん? あら、ひまちゃん起きちゃったの?」

ひまわり

「たい！」

みさえ

「ひまちゃんも一緒にお兄ちゃんを迎えに行きましょうね」

ひまわり

「たい！」

こうして、みさえはひまわりを連れて出かけたのだった。

一方、馬の尻公園…

そこでは、カスカベ防衛隊メンバーがいつもの様に集まり、みんな
思い思いに遊んでいた。

その一角で、野原しんのすけは一人デジカメ（ただし色合いが黒と
マゼンタという奇抜な色だが）を手に、公園の風景を写真に納めて
いた…

しんのすけ

「おお～いい景色ですな～！撮ろうっと！」

—カシャッ—

しんのすけ

「……………はあ……………やっぱり……………」

そう言ったしんのすけが持つデジカメの画面には、たった今撮った
景色が映っていた…ただしその画面は、奇妙に歪んでいるのである…

風間

「どうしたんだ？しんのすけ？もしかして、また写真が歪んでいるのか？」

しんのすけ

「お、風間くん…実はそうなんだゾ……」

風間

「でも、なんでそんな写真になるんだ？この間まで、何とも無かったんだろ？」

そうなのだ。つい最近までは、普通の写真を撮っていたのだ…風間のこの質問に、しんのすけは意外な回答をする…

しんのすけ

「…世界が…オラに撮られたがってないんだゾ…」

風間

「……え!？」

突然のしんのすけの一言に、風間は一瞬固まる…しんのすけの表情があまりにも真剣だったから……

しんのすけ

「……………なんちゃって……」

風間

「……………って冗談かよ！！！！？？」

しんのすけ

「あはははは」

風間

「……………はは……………（汗）」

しんのすけ

「もう一枚撮ろうっと！」

そうやってしんのすけは写真を撮ろうと再びデジカメを構える。しかし、その画面には先程までいなかったはずの少女が立っていた。

謎の少女

「……………ディケイド……………もうすぐ、君の世界は終わります……」

しんのすけ

「！？お姉さん誰！！？」

しんのすけはすぐさまデジカメを離すが、そこには誰もいなかった……

しんのすけ

「……………？？」

風間

「おい、どうしたんだ？しんのすけ？」

しんのすけ

「い、今そこに人が…」

風間

「？何言ってるんだ？この公園には最初から僕達以外誰もいないぞ？」

しんのすけ

「……へ？」

ならば、さっきの少女は…しんのすけは身震いをし、今の事を忘れる事にした…

ネネ

「ねえ、あれしんちゃんのママじゃない？」

マサオ

「あっ本当だ！」

ボー

「ボ！」

二人は公園の入り口を見ると、道の向こうからみさえがひまわりを乗せたベビーカーを押してやってくるのがわかった。

しんのすけ

「ほっほーい！母ちゃーん！」

みさえ

「はいはい、みんなそろそろお家に帰る時間よ。」

しんのすけ

「おおっ！そういえばそうだゾ！」

言ってしんのすけは腕に落書きした腕時計を見る。

みさえ

「あんたねえ…それ、落書きじゃないの…」

しんのすけ

「細かい事は気にしないの！」

みさえ

「全くもう…そうだ、みんな今から家でシュークリーム食べていかない？」

しんのすけ達

「ヤッター！」

そう言って一同が公園を出発したが道の片隅のゴミ捨て場の鏡に、その鏡の前には誰もいないのに関わらず、鏡には龍の紋章のついた

仮面を着けた者が映っていたのを、一同の誰も知るよしもなかった…

―帰り道―

しんのすけ達

「シュークリーム♪シュークリーム♪」

みさえ

「ふふふ…」

そう一同が賑やかに歩いていた時…ついに悲劇が起きてしまう…

―ブオオオオオンッ―

みさえ

「!?!」

風間

「何だこれ!?!」

その時一同と周りの通行人の前に、突如歪みの壁が現れた…

そして歪みの壁から、全身がステンドグラスの様な怪物―ファンガイア―が現れる。

ファンガイア達は、目の前に宙に浮く牙の様な物体を出現させると、それ近くの通行人の首の根元に突き刺す。

襲われた通行人は、苦しみながら徐々に透明になりそのまま絶命してしまった…

マサオ

「ヒ、ヒイイイイイイイイイイイイッ!!!!」

ネネ

「キャアアアアアアッ!!!!」

みさえ

「み…みんな!! 逃げるわよ!!」

ボー

「待って、おばさん! しんちゃんが、壁の向こうに!!」

みさえ

「ええっ!?!」

しんのすけ

「母ちゃん!! みんな!!」

みさえは声が聞こえた方を向く。そこには、壁の向こうで自分達を呼ぶしんのすけの姿があった。

みさえ

「し、しんのすけ!!」

しんのすけ

「母ちゃん!! 母ちゃ……ブオオオオン……」

壁の色がすぐさま濃くなり、しんのすけの声は聞こえなくなってしまったのだった…

しんのすけSIDE

しんのすけ

「母ちゃん!! みんな!!」

そう言ってしんのすけは壁を叩くが、壁の向こうからは何も返答は無い…

しんのすけ

「…………あれ?何時の間に夜になったんだ?」

気付けば、しんのすけのいる場所は夜の公園になっていて、不思議に思ったしんのすけは辺りを見回す。
すると、向こう側から先程の公園で見た少女がしんのすけに近づき、こう言った。

謎の少女

「ディケイド…今日がその日です…」

しんのすけ

「はあ!?!何言って…!?!」

しんのすけが言い返そうとした瞬間少女は消え、更に上空から逆さまな街並みが迫って来た。その光景にしんのすけが驚くと、しんのすけの頭上スレスレの所でそれは停止した。更にその逆さまの街並みの中であの少女が立っていた。

しんのすけ

「び、びっくりしたな〜?!?!?」

謎の少女

「……君のバックルとカードはどこです?」

少女はそう言い残した後、逆さまの街並みと共に消えていった…

しんのすけ

「????……バックル?カード?何のこっちゃ?」

と暫く考えるしんのすけだったが、

しんのすけ

「ってそんなことより、母ちゃん達だゾ!! 早くお助けしなきゃ!」

と言って、みさえ達を探しに走って行ったのだった…

みさえSIDE

―瓦礫の街―

みさえ

「ハア……ハア……」

ネネ

「私……疲れた……」

風間

「無理も無いよ……あんな事が起きれば……」

そう言って一同はその場に座り込む……あれから様々な怪物に遭遇したのだ。それにより、全員の体力は逃げ続けた事で限界に近づいていたのだ……

みさえ

「……………ん？」

みさえはふと、瓦礫の奥に何かがあるのに気づき、それを手に取る……そして、みさえは驚愕した……

みさえ

「こ……これは……………!？」

それはなんと、みさえが何時も見ていた夢の中で、ディケイドが腰に付けていたベルトであったのだ。

みさえ

「どうして……これが………!!?」

しんのすけ

「母ちゃん!! みんな!!」

ボー

「あ!! しんちゃん!!!!」

ひまわり

「たいやいやい!!」

みさえ

「え? ……!! しんのすけ!!!!」

自分達を呼ぶ声に気づき、声のした方を見ると、歪みの壁の向こうでしんのすけが壁を叩いていた。

風間

「しんのすけ! 無事だったんだな!!」

しんのすけ

「これが無事って言える？」

安堵する一同だが、すぐにその空気が変わる。

しんのすけ

「？母ちゃん……？」

みさえ

「え………？」

言われて、みさえは後ろを振り向く…すると、そこにはニヤニヤと不気味な笑みを浮かべるみさえがいた…

みさえ

「え？………私？？」

みさえが驚いていると、不気味に笑っていたみさえ？はすぐさま怪物『ワーム』のサナギ体の姿に変わり、更に成虫ワームへと変化した。

マサオ

「ヒイイツー！！またお化けだああああっ！！！！！！！！」

みさえ

「う……嘘……！！」

しんのすけ

「……………!!!!母ちゃん!!!!!!みんな!!!!!!……………ツウオ
オオオオオオオオオオオオ!!!!!!」

しんのすけは力任せに歪みの壁を殴ったが壁はビクともせず、しんのすけが壁を殴る音だけが虚しく響く……

しんのすけ

「くそオ!!!!! こんなもんなのか!!?世界が終わる日
つてのは.....!?!」

しんのすけが運命に絶望したその時、みさえの手にある物がしんのすけの目に入った。そして、あの時の少女の言葉を思い出す。

— …… 君のバックルとカードはどこです？ —

しんのすけ

「バックルとカード……これの事か！！母ちゃん！！！」

みさえ

「な、何？」

しんのすけ

「それをよこして……早く……」

みさえ

「…でも……………！」

しんのすけ

「大丈夫……オラが世界を救うゾ……………！！！」

みさえ

「……………わかったわ……信じてるからねしんちゃん……！！！」

そしてみさえはバックルとカードをしんのすけに差し出す。すると傷だらけだったそれらは歪みの壁をすり抜け、同時に元通りの姿へと変わった。

そしてしんのすけが受け取った瞬間、みさえ達はワーム達に襲われる。

みさえ

「いや！！こないで！！！」

偶然落ちていた鉄パイプを使って応戦するが、彼らの命が危険なのは変わらなかった。

しんのすけは、急いで白い板……”ライドブッカー”を開き、一枚のカードを取り出す。更にバックル”デイケイドライバー”を腰に装着し、バックルを展開する。

そして、ライドブッカーから取り出したカードを前にかざし、しんのすけは叫んだ……しんのすけ

「変身ッ!!」

しんのすけはカードをバックルに装填し、バックルを閉じた。

【KAMEN－RIDE】

【DECADE!!】

バックルから音声が鳴った瞬間しんのすけの周りに9つの紋章が現れ、更にそれは9つのビジョンに変化しその全てがしんのすけに重なり、しんのすけは姿を変える。

身長は成人男性の物となり、複眼部分が緑で全身が白とグレーと黒のスーツに覆われた。

更に頭部に7枚のカード状の物が現れ、更に次々と頭部に差し込まれる。それと同時にスーツのグレーだった部分が鮮やかなマゼンタへと変わっていった。

直後、変身した際に発生した衝撃波により歪みの壁は割れ、破片がワーム達に当たりワーム達を退ける。

みさえ

「キャアッ!?!……………え!?!」

みさえはまたもや驚愕した。何故なら、今日の前に立っているしんのすけの姿が、夢に出てきたディケイドそのものだったからである…

みさえ

「しんちゃん……どうして……?!」

ディケイドはワームを倒すべく一步踏み出すが、ワーム達は突如驚異的な速度で動き、その場を離れてしまった。ワームの特徴的な能力、『クロックアップ』だ。

ディケイド

「ちょこまかと……!!」

ディケイドはそう言うのと、一枚のカードを取り出しバツクルに装填する

【KAMEN-RIDE】

【KABUTO!!】

その途端ディケイドの姿がみるみる変わり、別の仮面の戦士、『仮面ライダーカブト』へと変わった。

場所は少し変わり、別の瓦礫の街を先程のワーム達がクロックアップで移動していた。そこにカブトに変身したディケイドが現れ、更にカードを一枚バツクルに装填する。

【ATTACK—RIDE】

【CLOCK UP!!】

その間、一体のワームが柱を破壊しその破片を飛ばしてくるが、アタックライドのカード『クロックアップ』によってディケイドの周りの空間がゆっくりになり、ディケイドは破片を腕で全て弾いてしまった。

そのまま、ライドブッカーソードモードでワーム達を次々と薙ぎ倒してゆく。

ディケイドカブト

「ハッ！タッ！ヤアッ！」

最後の一体を切った直後クロックアップが解除し、同時にワーム達は爆砕していった…

そしてバツクルからカブトのカードが役目を終えたと言う様に飛び出した。

そのカードを見ながら、ディケイドは疑問に思っていた…

ディケイド

「…なんでオラ、このカードを選んだんだ…？」

「とりあえず、オラン家だゾ」

言われてみさえ達はディケイダーに乗り、一同はその場を後にした…

道路を滑走するディケイダーに乗るディケイド達…

すると突然周りの景色が変わり、先程とはまた別の瓦礫の街となっていた。

ディケイドはディケイダーを止め、何気なく地面を見た。するとそこには、怪物達に襲われたであろう数人の亡骸が横たわっていた…

何故こんな事に…そう思いながら、ディケイド達は再びディケイダーを発進させた。

その直後、亡骸は灰に変わっていった…

次の瞬間、その灰の下から灰色の触手が出現し、ディケイダーに乗っていたネネとマサオを叩き落とした。

ネネ

「キャアッ!!」

マサオ

「うわあっ!?!」

ディケイド

「!!…ネネちゃん!!オニギリくん!!」

ディケイドはすぐさまディケイダーを止め、降りる。すると今度は、

道の奥から灰色の怪人『オルフェノク』が数体現れた。

ネネ

「イ、イヤアアアアッ！！！助けてしんちゃーんっ！！！！」

マサオ

「ひどいしんちゃん……た、助けてえ……っ！！」

みさえ

「しんちゃん！！」

ディケイド

「わかってる！！」

そしてディケイドは一枚のカードを取り出し、装填する。

【KAMEN－RIDE】

【FAIZ！！】

すると赤い閃光がディケイドの全身をライン状に走り、光がやむとディケイドは姿を変え、今度は先程とは別の仮面の戦士、『仮面ライダー555（ファイズ）』となっていた。

続けてディケイドはディケイダーの方を向き、更に取り出した一枚のカードを装填する。

【ATTACK—RIDE】

【AUTBAJIN!!】

すると今度はディケイダーの正面にファイズの紋章が出現し、それがディケイダーを通過するとディケイダーはファイズの相棒『オートバジン』へと変わり、更にロボットモードに変形し飛行、オルフェノク達にバルカンを発射しながらネネとマサオを救出する。バジンは二人を離れた場所まで連れて行き、そこで降ろした。ディケイド達も二人の元へ駆け寄る。

ディケイドファイズ

「隠れてて、みんな！」

ディケイドはそう言うと、バジンのグリップ兼ファイズ専用光剣『ファイズエッジ』を抜き取る。そしてオルフェノク達を次々と斬りつけて行き、その全てを倒した。倒されたオルフェノク達は青白い炎を上げ、次々と爆砕していった。

そしてバックルからファイズのカードが飛び出し、カブトのカードと同じく絵柄が消滅した…

ディケイド

「これもか……!?!」

直後に感じた気配にディケイドを見ると、そこには無数の妖怪『魔化魍』がいた。

ディケイドはカードを取り出し、装填する。

【KAMEN-RIDE】

【HIBIKI!!】

すると今度はディケイドを紫の炎が纏い、炎が晴れるとディケイドは新たな仮面の戦士、『仮面ライダー響鬼』になっていた。

ディケイドは更にカードを取り出し、装填する。

【ATTACK-RIDE】

【ONGEKIBOUR-EKKA!!】

するとディケイドの手に響鬼の主要武器『音撃棒・烈火』が出現する。更に音撃棒の先端に炎が灯る。

そしてディケイドは、その炎を魔化魍達に向けて飛ばした。炎は魔化魍達を次々と燃やしていく。

そんな時、彼は思った…

ディケイド響鬼

（何でだろう……身体が勝手に動くゾ……これもカードの力？……いや……オラは戦い方を知っている！？）

そう思っている間に、ディケイドは魔化魎を殲滅し、響鬼のカードが飛び出しましたカブトやファイズの時と同様絵柄が消滅した……

ディケイドは暫く立ちすくんだが、すぐにみさえ達と一緒にその場を離れた……

――野原家のすぐ側――

変身を解いたしんのすけとみさえ達が走る。

そしてしんのすけは9枚の絵柄の消滅したカードを見ていた。

しんのすけ

「どうして！？力が、長く続かない……！！」

その時、あの少女の声が響いた

謎の少女の声

『それは、君がかつて全てを失ったから……』

しんのすけ

「……え？」

風間

「しんのすけ？何してんだ？」

しんのすけ

「……………！！…あれは……………！！」

みさえ

「……………え？」

しんのすけの一言に一同がしんのすけの見ている方角を見ると、そこにはマンションがあった。しかしそのマンションは、無数の魔化魍が這いつくばっていた…
しかもその内の飛行する龍の様な魔化魍は、他の飛行している魔化魍を食べている…

風間

「……………共食いしてる……………！！」

そして一体の魔化魍が他の魔化魍にぶつかり爆発、更に周りの魔化魍に誘爆してゆき、目の前の町が炎に飲まれて行く…

一同は自分達の最後を悟り、立ちすくむ…

しかし、その炎は目の前ギリギリで突然停止した。

みさえ

「もう……………何なのよ……………！！」

しんのすけ

「……………!?!」

一同が咄然とする中、しんのすけは炎の中から人影が近づいているのに気づいた。その人影は、またしてもあの謎の少女であった。

謎の少女

「…ディケイド……これが世界の終わりです…」

少女の出現にしんのすけを除いて驚く一同…
そして、しんのすけは思い切って話す。

しんのすけ

「ねえ! どうしてこんな事に!? 教えて欲しいゾ!」

謎の少女

「……………わかりました……」

—パチンツ—

少女が指を鳴らすと同時に辺りが暗くなり、しんのすけは何事かと辺りを見回す。すると辺りがだんだんと明るくなってゆき、そして次の瞬間しんのすけは自分の目を疑った。

果てしなく広い宇宙空間に、幾つもの惑星が広がる景色だが、その惑星全てが地球に疑似していたのだから…

しんのすけが景色を見上げているとそこに謎の少女が現れる…

謎の少女

「…驚いたでしょう？」

しんのすけ

「な…何あれ…？…地球みたいだけど…？」

謎の少女

「…ええ。全て地球です…」

しんのすけ

「……！？……これが……！？」

驚愕するしんのすけをよそに、話を続ける少年…

謎の少女

「9つの世界に、9人の『仮面ライダー』が生まれ、彼らはそれぞれの世界で物語を作っていました…しかし今、その全ての物語が融合しようとしています…君は今から、9つの世界を旅しなければなりません…」

言われて、しんのすけは9枚のカードを見る…そして、厳しい旅になることを予感した…

謎の少女

「全てを破壊し、全てを繋いでください。それが世界を救う、たった一つの方法です……………」

しんのすけ

「……………破壊……………」

謎の少女

「……ええ……………残念ですが……………」

少女が言い終えた直後景色が変わり、しんのすけはまた先程の家の手前に戻っていた。

謎の少女の声

『……………君が世界を救うまで…私と、私の仲間が、この世界をもう少しだけ生き長らえさせてあげましょう……………』

これを最後に、謎の少女の声はしなくなった……

――野原家――

――ザ――――――――――

ひろし

「……あれ……？ テレビつかねえな……？」

ちなみにひろしは、この日は偶然にも会社が休みだったので、無事

であつた…

しんのすけ

「おかえり……」

みさえ

「…ただいまー……」

ひろし

「おう、おかえり…おや、みんないらっしやい！」

風間達

「おじゃましまーす………」

ひろし

「……？」

―野原家床の間―

風間

「…で？どうすればいいんだ？これから……」

しんのすけ

「9つ世界を旅するしかないゾ。…オラ達の世界を、お助けしなきや！―！」

みさえ

「……そう…なら、止めはしないわ。あなたのやりたい様にしなさい！」

しんのすけ

「おお～母ちゃん太腿～～～！」

みさえ

「それを言うなら太っ腹！」

しんのすけ

「そうとも言っ～～」

みさえ

「……………」

みさえは、ふと夢の内容を思い起こしていた…

もしかしたら、しんのすけはいずれ…

しかし、彼女はすぐにその考えを捨てた。あり得ないと。

誰よりもおバカで、誰よりも能天気で…そして誰よりも優しいしんのすけが、あんな事をするはずがないと…

マサオ

「……ところで、どうやって他の世界に行くの？」

しんのすけ

「……………あ、聞いてない……………」

ネネ

「ええ!？」

風間

「さては、忘れたな!？」

しんのすけ

「だから聞いてない!! あゝもう…あのお姉さん…肝心な事を…
…」

悩む一同……そこにひろしが言う。

ひろし

「……人は皆、旅人だよ……ほら、こんな時は写真でも…」

しんのすけ

「何で？」

ひろし

「なんとなくさ……あれ？」

ひろしは、かつてしんのすけの為に買った垂れ幕の紐を引くが、全く動かない…

ひろし

「あ、このせいかな…」

ひろしはようやく原因をしり、紐を整える。すると垂れ幕が降り、降りてきた垂れ幕から突如まばゆい光が放たれ、それ収まると、今度は一同が驚く。

なんと、垂れ幕に絵が描かれていたのだ：

その絵はどこかの町並みをパトカーが走り、奥には学校とその裏に山頂に大きな岩がある山がそびえているという絵であった：

しんのすけは何かを感じ、外へと飛び出す。

するとそこはいつもの隣近所やお向かいの家は無く、絵の中の町並みと同じ町並みが広がっていた：

丁度パトカーも走っている：

そこへ、突如声が響いた。

【全職員に通達する。現在、すすきヶ原第三倉庫にて、未確認生命体と交戦中：】

しんのすけ

「：！！？何だこれ！？」

しんのすけは、自分の姿に驚いた。何故なら、しんのすけの姿はいつもの赤のシャツと黄色い短パンではなく、警察官の格好へと変わっていたのだ。

――すすきヶ原第3倉庫――

そこでは、大勢の警官と警官隊達が一体の怪人、”未確認生命体7号”を食い止めていた。

警官

「撃てー！ー！ーっ！！！」

警官の一人の合図で、警官達は7号に向け一斉射撃を行う。

しかし、7号は少し仰け反った位で全くダメージを負わなかった…

ーガシヤアアアンッー

7号

「グウウオオオオオッ！！！！！」

7号は近くに止まっていた覆面パトカーをひっくり返し、警官達を威嚇する。

その時、数台のパトカーが到着し、その内の一台から黄土色のコートを羽織った女性刑事が出てきた。

その女性刑事は7号を確認すると、すぐさまパトカーの無線を取り誰かに連絡する。

女性刑事

「こちら一条。のび太君、聞こえる？」

ー第3倉庫前ー

そこでは、小学生位の少年と、青い動物の様な物がバイク『トライチェイサー2000』に乗って走っていた。

一条

【只今、未確認生命体7号と交戦中。すぐに応援に来て！】

のび太

「はい！一条さん！……ところで何でドラえもんまで来たのさ！？」

ドラえもん

「だって、僕はのび太君が心配なんだもん……！」

のび太

「…全くもう……」

場所は再び第3倉庫…

無線を終えた一条は、腰のホルスターから自分の拳銃を取り出し、7号に接近する。

その時倉庫の壁が崩壊し、中から待ち伏せしていたかの如く、新たな『未確認生命体8号』が出現する。

8号は近くにいた一条に襲いかかる。

一条

「な……っ！？キャアッ……！」

そして、そこに丁度のび太達が到着しのび太は襲われている一条を見た。

のび太

「一条さん!!」

そしてのび太は腰の前に両手をかざす。するとあのび太の腰に、バックル部分に霊石アマダムが埋め込まれた銀色のベルト『アークル』が出現し、鼓動を刻み出す：

そしてのび太は走りだし、左手を左腰に置き右手を左前に突き出して、更にその右手を右へと動かし叫んだ。

のび太

「変身っ!!」

そして最後に右手と左手を左腰で重ねて、更に気合いを入れた。

その瞬間のび太の身体を、アークルを中心にアマダムに収められている強化皮膚である赤の装甲が覆い初め、そしてあのび太が完全に装甲に覆われたその姿こそ、赤き古代の英雄、『仮面ライダークウガ』なのだ。

クウガ

「ハアッ!!」

クウガは高くジャンプして、一条を襲う8号に強力なパンチをお見舞いし、一条を8号から救った。

所変わって野原家前…しんのすけはただ一人、景色を見ながらつぶやく…

しんのすけ

「……クウガの……世界……!!」

しんのすけのしている先には山頂に黒い岩がある山がそびえ立ち、その空はどこまでも青く広がっていた……

THE NEXT RIDER KUUGA

ライダー大戦だゾ（後書き）

！ ！
今回の、クレヨンしんちゃん嵐を呼ぶ仮面ライダーディケイドは！
しんのすけ

「巡査、野原しんのすけ！…どうやら、この世界でのオラの役割らしいゾ」
一条

「未確認………10号……！？」

のび太

「噂通りだな…悪魔！」

次回 クウガの世界【ドラえもん】

全てを破壊し、全てを繋げ

！！

超・嵐を呼ぶ予告（前書き）

大好評だった夏の劇場版のクレヨンしんちゃん嵐を呼ぶ仮面ライダー
1デイクライド版の予告です。

書けるかどうかかわからないですが、頑張って書いてみせます！

超・嵐を呼ぶ予告

”仮面ライダー”の長い歴史に、確かな足跡を残した”仮面ライダー電王”。

時の列車が駆け抜けたレールは、もはや”伝説”になろうとしている……

しかし、本当の新たなレールが今、ここに姿を現す！！

田舎の平和な村に突如として姿を現した鬼の一団・オニー族。彼らは大きな地震で一時的に過去と現在が繋がったのを利用して＜鬼の切り札＞を探しに來たのだ。

しかし、それを追ってデネブと良太郎、さらに幸太郎達も駆け付けた。過去で鬼が退治されていない事で、現在の時間が歪み始めているからだ。

そのために良太郎もコハナのように小さくなり、モモタロス達ともはぐれ、侑斗はその姿を消してしまった……。

鬼の切り札の行方は？歪んだ時間を正すため、小さな良太郎一行の鬼退治が開始される！！

襲い来る金と銀の仮面ライダーを相手に、鬼退治の武士トキを助け、新フォームの電王がド迫力バトルを展開。はたして、時間の歪みは直せるのか？モモタロス達は無事なのか！？そして、ディケイド、しん王の参戦、戦艦対電車の戦いがクライマックスを過激に彩る！！いざ！＜超・電王＞発車のベルが鳴る！！

「俺達、再び参上!!」

「オラも、再び参上!!」

クレヨンしんちゃん×仮面ライダー電王スペシャル 超仮面ライダー
電王+しん王&ディケイド NEOジェネレーションズ 鬼ヶ島
の戦艦

おバカとおバカが、時間を救う!!

電王編後執筆予定!!

超・嵐を呼ぶ予告（後書き）

…あくまで予定は未定なので…（；；
。D。
）

クウガの世界だゾ【ドラえもん】前編（前書き）

大変長らくお待たせしまして、ご迷惑お掛けしました！遂に最新話です！

クウガの世界だゾ【ドラえもん】前編

―野原家客間―

「巡查、野原しんのすけ!…どうやら、この世界でのオラの役割みたいだゾ」

そうやってしんのすけは、自分の身分証明書（警察専用）をみんなに見せる。

「ふーん…なあしんのすけ、いつのまにそれに着替えたんだ？」

「いきなりだゾ。気付いたら変わってた」

風間の質問にそう答えるしんのすけ。とその時、テレビの番組が突然切り替わる。

【番組の途中ですが、ここで臨時ニュースです。すすきヶ原第3倉庫にて、未確認生命体が出現しました。現在、警察が未確認生命体と応戦しており…】

「…未確認生命体？」

とネネが言うと、しんのすけが説明を始める。

「未確認生命体…それがこのクウガの世界での敵だゾ。…そして」

そう言って、しんのすけはどこから出したのか新聞をテーブルの上に置いた。

その一面に「4号、6号を倒す」と書かれていた。

「どうやらこの世界では、クウガは未確認生命体と同じ扱いみたいなんだゾ」

「クウガの世界…って僕達、本当に別世界に来ちゃったんだ…」

とマサオが言うと、

「天はミソレだゾ！カスカベ防衛隊、ファイヤー！！」
しんのすけがそう言って外へ出発してしまった。

「あっおい、しんのすけ！！それを言うなら『善は急げ』だ！……みんな、行こう？」

「うん！」

「そうね！」

「うん。」

風間はネネ達の返事を聞いた後、みさえに尋ねる。

「おばさん達は、待っていてももらえますか？」

「……本当は着いて行かないと駄目だけど…あなた達を信じるわ！」

みさえは、優しい笑顔でそれに答える。そして一言。

「……無理しないでね。………いつてらっしゃい！！」

「「「………はい！！（ボ！！）」」「」」

そして、カスカベ防衛隊は出かけていった…

そこでは野比のび太こと、仮面ライダークウガが未確認7号、8号と戦っていた。

「4号が現れたぞ！」

「どうする！？」

「あの青いタヌキは？」

「いつものだろ、ほっとけ」

周りの警官隊は、クウガが現れたことにより動揺する。そこに一条が話し掛ける。

「4号が人類の味方なのは明確です！今の内に、逃げ遅れた住民に避難を！ドラえもん君、あなたも手伝って！」

「「「「はい！」「」「」「」

「はい！」

一条の指示を受けた警官隊とドラえもんは、7号と8号をクウガに任せ、住民の避難させるべくその場を去った。

一方クウガは、さすがに2対1は不利なのであろう、7号と8号に苦戦していた。

「えいっ！！やあ！！」

クウガは、ふと倉庫の中を確認する。そこには、女性警官の亡骸があった…

「…まただ！！どうして女の人ばかり……………！？……………デァア！！」

クウガは、自慢の体術で2体を倉庫内に追い詰める。しかし、まだ

倒すまでには至らなかった…
そこに、一条が言う。

「相手の動きに合わせないで！身軽に動いて！」
「わかってます！！」

そう返事を返したクウガは、落ちていた鉄パイプを手を取った。

「超変身！！」

クウガが叫ぶと、アークルから今度は清らかな鼓動が鳴り響き、クウガはその姿を青のクウガ、『ドラゴンフォーム』へと変えた。

そして手に持っていた鉄パイプは、瞬時に青のクウガの専用武器、『ドラゴンロッド』へと変化した。

倉庫の入り口では、いつの間にかしんのすけがデジカメを持って立っていた。

「『仮面ライダークウガ』：相手に合わせて姿を変えて、周りの物を武器に変える……よく出来てるゾ…」

しんのすけは言いつつ、写真を撮る。その間に、クウガは勝負を決めようとしていた。

「……！？ちょっとその君！子供がここで何をしてるの！？」

「お姉さん、オラと写真撮らな〜い？」

「……ふざけてないで、早く帰りなさい！！」

「それよりアレ、勝負つきそうだゾ？」

「え？」

しんのすけに言われ、一条はクウガを見る。すると、確かに勝負は

終わりそうだった。

「ハアアアアッ……………ダアアアアアアア！……………！」
「グオッ!?」

クウガはロッドに封印エネルギーを込め、青のクウガの必殺技『ス
ブラッシュドラゴン』を7号に叩き込んだ。

「グ……………グオオ……………オオオオオオオオオオオオオオ！……………！」

7号は断末魔の叫びを上げ、爆碎していった：

「ギギ!!」

8号はとてもかなわないと考えたらしく、翼を羽ばたかせてそのま
ま倉庫の屋根を突き破り、逃走をはかる。

「逃げる気か!?」「のび太君!」!
「これを!!」

一条は、クウガに銃を渡す。

「一条さん、ありがとうございます!超変身!!」

クウガは一条に礼を言った後、直ぐ様姿を変える。

アールクから、今度は風を切る様な鼓動が鳴り響き、その姿を緑の
クウガ『ペガサスフォーム』へと変えた。

更に、銃は緑のクウガの専用武器『ペガサスボウガン』へと変化し
た。

「ハアッ!!」

クウガはすぐに8号の後を追いかけて屋上へとジャンプした。

「……………いい? 誰にも言っちゃ駄目よ?」

「ほい」

しんのすけの返事を聞いた一条は、すぐに自分も屋上に向かった。

そして屋上では、クウガが空を飛ぶ8号を見ていた。そのままペガススボウガンのレバーを目一杯に引き、そして離れた。

すると、ペガススボウガンの銃口から高密度の空気の矢を8号に向けて放った。

これぞ、緑のクウガの必殺技『ブラストペガスス』である。

そして矢は8号を貫いた。

「ギアアアアアアアアアッ!!!!!!!!!!」

8号はそのまま爆砕、跡形も残る事はなかった…

「のび太君!」

「のび太くん!」

「…あ! 一条さん! ドラえもんも!」

そこに一条とドラえもんが現れた。

「やったねのび太くん!」

「うん! あと一条さん、どうでした? 僕の変身!」

と、のび太は変身を解き一条に問うが、一条は何も言わずに背を向け、そして言った。

「…………のび太君、今日はもう休みなさい。」

「……………一条さん??」

―帰り道―

「なあ、しんのすけ」

「なに? 風間くん」

「さつき、女性警官が殺されていたけどさ…なんでだ?」

その風間の質問に、しんのすけは答えた。

「あれは、『ゲゲル』だゾ」

「『ゲゲル』?」

「うん。ゲゲルって言うのは、グロンギ達の殺しのゲームで、いろいろなルールがあるんだゾ。」

「こ、殺しィ!? ヒィィィィィッ!」

「ルールって?」

オニギリ、もといマサオが悲鳴を上げる。そして今度は、ネネが質問した。

「例えば、何人殺すとか…あと、女の人だけ、子供だけとかだゾ」

「怖いわね…」

ネネが言った後、風間は心の中でつぶやいた。

(…………ネネちゃんも同じくらい怖いよ…………)

「…風間くん、今なんか変なこと考えなかった?」

「えゝえ!」

ネネの発言に風間はかなりビビリ、すぐに弁解の言葉を言おうとした。しかし、ネネは更に衝撃的な発言をする。

「……あんたは『そんなこと考えるわけじゃないか』と言う」

「ハハッいやだなあ、『そんなこと考えるわけじゃないか』……ハッ!？」

「……………(ニヤリ)」

ネネは某スペクタクルアドベンチャー漫画の2部主人公ばりのセリフの先読みを見せつけ、風間は驚愕し、ネネは得意げに笑みをこぼす。

なんか周りから『バァー……』とか効果音が聞こえそうである。それをみた残り3名は……

（（なにやってんだこの人達……））

と、思わざるを得なかったという……

―その日の夕方野原家前―

そこには、人影があった。

「あれ？ここ、喫茶店じゃ……」

「つぶれちゃったとか？」

どうやら、のび太、ドラえもんの二人だった。

「えーい！一か八かだ！」

「ちよっ!？ま、まずいよそれは!！」

—ピンポーン—

『はい』

「うわあっ！どうするのこれ！」

「当たって砕けろ……！！！」

「何かっこよくいってるの！？」

と、二人がコントを繰り返し広げている内に玄関のドアは開くのであった…

—野原家居間—

「…で入れさせて貰ったけど……」

「どうする？」

「さあ……」

「さあって…（汗）」

あの後、意外にもすんなりと入れて貰いおまけにお茶まで煎れて貰い、二人はかなりちぢこまっていた。

そこで、空気を変えるためのび太が話す。

「そ、それで君達は別世界の住人で、自分達の世界を救うために9つの世界を旅している、というわけなんだね？」

そしてのび太の問いに、風間が答える。

「はい…信じて貰えないでしょうが…」

「いや、そんなことないよ。僕らも、そういうの日常茶飯事だし」

「そ、そうですか…（日常茶飯事って…この人達どんな日々を送っ

てるんだろう…?」

風間が心の中でツツコミをしていると、台所からしんのすけとみさえがやってきた。

「ご飯出来たよー!」

「今日はしんのすけ特製炒飯よ!」

みさえのその言葉に、ネネが言う。

「え! しんちゃん料理出来るの!?!」

「ええ、つい最近からね。ほら、あなた達も食べていって!」

「え、いいんですか?」

「おかわりは沢山あるゾー!」

そして昼食を食べおわり、のび太達が帰る準備を完了しのび太がチエイサーのエンジン掛けようとすると、風間がのび太の所へとやってきた。

「? どうしたの?」

のび太が問い掛けると、風間はゆっくりと話し始めた。

「…あの、のび太さんって……………クウガ…ですよね?」

「!?! ……………うん…………」

風間の突然の言葉にのび太は驚き、暫く沈黙してから返事を返した。風間は、更に続けた。

「ねえ、のび太さんって…何のために戦ってるんですか?」

その質問にのび太は更に沈黙し、そして話す。

「…………自分のため、かな」

「自分の……？」

「うん。誰かを守るためだとか、世界を守るとか……僕には、そんなの大きすぎるから……あとは……わかんない……」

「……のび太さん………」

そんな時、トライチェイサーに一条から通信が入った。

【のび太君！すすきヶ原トンネルで、未確認9号が確認されたわ！私も今向かっているから、あなたもすぐに来て！】

「はい！わかりました！」

「のび太さん……」

「……炒飯、おいしかったってあの子に伝えといてね。それじゃ、僕は未確認を倒しに行かないと！」

「のび太くん！」

「ドラえもん、早く！」

そう言って、のび太とドラえもんはトライチェイサーに乗り、走り去っていった……その物影で、しんのすけがこっそりと立っていたのは、誰も気付く事はなかった……

――すすき川、すすきヶ原トンネル――

そこでは二人の女性警官が襲われており、一人は既に絶命していた。そして残された一人がトンネル内に追い詰められ、今まさに9号に殺される所であった。

――ヴォオオオオオオンッ！！――

そこに、ディケイダーに乗ったディケイドが9号めがけ突進してきた。

そして見事命中し、9号は突然の有無を言わさぬ奇襲に驚き、混乱するがすぐに体勢を整え言う。

「!ッ：クウガバ!？」（クウガか!?）

「いや、違うゾ：」

「リントギ、ガザハデギホバ!？」（リントが、ここに何の用だ!?）

「グギグギうるさいゾ!オラはあんたに話を聞きに来たんだゾ!」

そう言ってディケイドは、9号に攻撃を放った。：言ってる事とやってる事が違うが：

その頃、トンネルの反対側の入口にのび太、ドラえもと一条が到着した。そして既に事切れている女性警官を見た。

「これで四人目：」

「：……ん!？」

と、のび太が何かに気付く。その直後、トンネルからディケイドと9号が現れる。三人は、それを見て驚いた。

「なんだ：あれ!？」

「未確認……10号!？」

そしてディケイドはバックルを展開し、ライドブツカーからディケイドの紋章が描かれたカードを取り出してバックルに装填した。

【FINAL—ATTACK—RIDE】

【D—D—D—DECADE!!】

ドライバーから電子音が流れた直後、ディケイドの正面に十枚の黄色いカード状のエネルギー体が、まるでカードのシャッフルの用に出現した。更にディケイドはジャンプし、エネルギー体もディケイドを追う。そしてディケイドはキックの体勢でエネルギー体をくぐり抜け始めた。

ディケイドがエネルギー体をくぐるたびに、そのスピードと右足の輝きは増し、そして最後は9号に命中し9号は爆砕していった。

「ッ!………すごい!!」

ドラえもんは、ディケイドの強さに驚きの声を上げた。そしてディケイドは、その場を去ろうとする。そんな彼にのび太が呼び掛けた。

「ねえ!どうして同じ未確認を倒したの!?!」

「オラはグロンギじゃない!!」

そのままディケイドはディケイダーに乗り、その場を去っていった…のび太はここで、不思議に思った…

「?今の喋り方…どこかで………」

のび太はディケイドに疑問を持った…そして何故か、以前謎の男性から聞いた忠告を思い出す…

—いつか君の前に、ディケイドと言う戦士が現れる—
—そして奴は君の住むこの世界を…—

破壊するだろう…

(……まさかね……)

のび太は考えるのをやめ、一条の元へと向かっていった…

続く…

クウガの世界だゾ【ドラえもん】後編（前書き）

今回は、新ライダーが登場します。

それではクウガの世界後編、スタート！

クウガの世界だゾ【ドラえもん】後編

―翌日、野比家のび太の部屋―

のび太とドラえもんが家でくつろいでいた。とその時、

―RRR・・・RRR・・・―

のび太の携帯に誰かから掛かって来た。

「誰からだろ？（ピッ）もしもし？」

「よっ！」

「……えっ！？君はあの時の！？」

なんとしんのすけであった。

「しんちゃん、でいいゾ！ところでさー、今からすすき川に来て欲しいんだけどさ、いい？」

「え…僕は別に構わないけど…て言うか、なんで僕の携帯の番号知って…（汗）」

「いいからいいからあ、細かい事は気にしないの！じゃ、そゆことでー！」

「ち、ちょっとしんちゃん！？……………切れちゃった……………」

「どうしたののび太くん？」

「なんか、すすき川に来てくれて言われたんだけど……………なんだろう？」

「さあね、でも言ってみたら？」

「そうだね…行こう、ドラえもん」

「うん！」

そして、のび太達はすすき川へと行くのであった：

―すすき川―

そこでは、しんのすけと一条がいた。そしてのび太達も到着する。

「いやー、どーもどーも。」

「あなたも呼ばれたのね」

「一条さん！」

「と言う事は、一条さんも…」

「ええ、この子に呼ばれてね。……………それでしんのすけ君、話って何？」

「ほい！」

言われてしんのすけは、話し始めた。

「まずは、女性警官が狙われたわけだけど、これには計画性があるんだゾ」

「計画性？」

「そ、未確認生命体…グロンギ達は、あの山を中心にして警官達を殺していたぞ…究極の闇の復活のためにね…」

「究極の……………闇？」

聞き慣れないワードに、ドラえもんが問う。

「そうだゾ、それが奴らの今回のゲゲルだゾ」

しかし、一つ疑問が生まれる。なぜこの事をしんのすけが知っているのか…しんのすけの能力を知らない三人には、全くわからなかつ

た。

そこで、ドラえもんが聞いた。

「ねえ、しんちゃん。その話、どこで…」

「…ああ、グロンギに聞いたんだゾ」

「「「……………ハア？（。；）」」」

しんのすけの言葉に、三人は頭上に『？』マークを出す。

「き、聞いたって…？」

「そゆこと！…セレボギレ、ギレズンザゾグ！」（いるんでしょ、出て来なよ！）

しんのすけは突然グロンギ語を喋り始めた。当然三人は驚いた。すると、木や岩の影から2体のグロンギが現れた。

『ゲゲルズ、ダジレルズ』（さて…ゲゲルを始めるぞ！）

『オンダダバグゴンバ、リント、バゴダシゲゴバソダ』（そのリントの女を殺せば終わりだ！）

その場にいるしんのすけを除く三人は身構える。

「未確認…！！」

「2体もいる…！！」

「さてと……ごめんね、お姉さん」

「え？……痛ッ！？」

「い、一条さん！？」

するとしんのすけは石ころを拾い上げ、それをなんと一条の額に投げ付けたのだ。石をぶつけられた一条の額からは、血が滲み始めた…

「しんちゃん！？何をするだアー！ツ！！」

「いや、待ってのび太くん！未確認の様子が…」

「！！」

しんのすけの行動に怒ったのび太は、愛犬を蹴られた田舎貴族の様な叫びを挙げる。しかし、その時グロンギ達に異変が起きた。

『リント、ビッグザオンダビジディダ！？』（リントの血が女について！？）

『ゲギマス、ゲゲル、ハギママギイダ！！』（聖なるゲゲルは失敗だ！！）

当然のび太達はわけがわからない。

「な…どうということ？」

「なんで、うろたえているんだろう？」

それをしんのすけが説明し始める。

「…あいつらは、血を流さずに殺しを行っていた…つまり、『一滴の血も出さずに女性警官を殺す』…それが究極の闇復活のゲゲルだったんだゾ」

「…つまり、奴らのゲゲルは失敗したって事なのね？」

「そういうことだゾ…」

そしてしんのすけは、ディケイドライバーを取り出し腰に装着する。

「さて、こいつらを倒すゾ！変身！！」

【KAMEN-RIDE】
【DECADE!!】

しんのすけはディケイドに変身し、グロンギ達に向かっていった。
そして、のび太が驚いた顔でそれを見ていた：

「…ディケイド…!!？」

一方神社らしき建物の前で、ディケイドが戦っていた。

「食らえ！」

【ATTACK-RIDE】
【SLASH!!】

「ハアッ!!」

ディケイドは、『スラッシュ』の効果で威力の増したライドブッカーでグロンギAを切り裂いた。

『グオオオオオッ!!』

そしてグロンギAは、断末魔を挙げて爆碎した。

「よしっ!……ん？」

ディケイドが気配を感じ、後ろを振り向くとそこにはディケイドを睨むのび太が立っていた。

「のび太君？」

「…しんちゃん……まさか君が……ディケイドだったなんてね…」

「?のび太君…なんでその名前を…」

「……ディケイド……君を倒す!!!」

そしてのび太はアークルを出現させ、構えをとった。

「変身ッ!!!」

のび太はクウガへと変身し、ディケイドに戦いを挑んできた。

「!?!のび太君!?!何を…」

「いつか僕の前に、ディケイドと名乗る戦士がこの世界を破壊しに現れると聞いた!?!……噂通りだな……悪魔!?!」

「!?!悪魔って…それどういう……おわ!?!」

クウガは攻撃を緩めず、ディケイドを倒そうとする。

「のび太君、やめてよ!オラ達が戦うなんて、おかしいよ!?!」

「うるさい!?!」

「ッおわあ!?!」

クウガの強力な一撃により、ディケイドは吹っ飛ばされてしまう。

「……のび太君……オラもいい加減、頭に来たゾ!?!」

クウガの攻撃に怒ったしんのすけが、とうとうクウガと戦い初めてしまう。

ディケイドはライドブッカードでクウガを切りつけ攻撃する。

対するクウガは、武器を持たないマイティフォームなので、ディケイドの攻撃に苦戦する。

「くそっ！なら…！」

クウガは落ちていた木の棒を拾い上げ、すぐに叫ぶ。

「超変身！」

すると、アークルから力強い鼓動が響き、クウガは紫のクウガ『タイタンフォーム』へと変化した。

そして手にしていた棒は紫のクウガの専用武器、『タイタンソード』へと変わる。

「これなら！はあっ…！」

クウガは再びディケイドへと戦いを挑む。

ディケイドとクウガは互いに切り合うが、クウガはディケイドの一瞬间の隙を突き、徐々にディケイドを押していく…

「どうだ…！」

「なら、近づかなきゃいいだけだゾ…！」

【ATTACK—RIDE】

【BLAST…！】

ディケイドは『ブラスト』のカードをバツクルに装填し、更にライドブッカードをガンモードにしてクウガに攻撃する。

「そらっ…！」

「ぐ…っ…！」

射撃を繰り出すディケイドに対して、クウガは遠距離戦の苦手なタ

イタンフォームなので、クウガはまた不利になってしまう。

「くっ！なら、こっちだって！」

クウガはそう言うと、一条のもとへ行き…

「貸してッ！！」

「のび太君！？」

そして一条のホルスターから乱暴に銃を取り出す。

「超変身ッ！！」

更にクウガはペガサスフォームへと変わり、そして銃から変化したペガサスボウガンを構え、ディケイドに攻撃する。

― 神社の傍ら ―

そこでは、しんのすけを心配した風間がおり、しんのすけを探していた。

「…ったく…しんのすけの奴、どこに行ったんだ…？？」

すると、誰かが戦う音がしてきた…

「！…しんのすけか？それとも、のび太さんなのか？」

そう言って音のする方向を見ると、なんとディケイドとクウガが戦っていた！

「!?!? な、なにやってるんだ!?!? どうして……!?!?」

風間は驚くが、しかしすぐに冷静になりディケイド達を見る。そして思った。理由はどうかあれ、このままではいけない、と。

「やめさせなきゃ………!!!」

そう思った矢先、ディケイド達に近づく影が…それは先程、ディケイドがのび太に戦いを挑まれ倒し損ねたグロンギBだった。

「危ない………!!!」

(何とかしなくちゃ……でも……僕は……)

そう思った途端だった…

「……力が欲しいか？」

「………え!?!?」

後ろからの突然の声に驚き、風間は振り向く…

そこには、一人の青年が立っていた…

その手にディケイドライバーに良く似たバックルを持って……

― 神社の前―

「はっ! ほいっ!」

「たっ! やあっ!」

ディケイドとクウガは再び殴り合いをしていた。

とそこに、グロンギBが近づく。

「!!のび太君!しんのすけ君!」

「二人とも、危ない!!」

それに気づいた一条とドラえもんが、ディケイド達に言った。

「え?.....おわ!?」

「な?.....うわあ!?」

一条達の呼び掛けでグロンギBに気づいた二人は、すぐに防御するも攻撃をまともに受け、仰け反ってしまう。

「こいつ.....!!」

「さっきの奴か...!」

二人はすぐに立ち上がる。

「お前...邪魔するな!!」

クウガは勝負を邪魔された事に怒りをあらわにして、グロンギBに攻撃しようとした。

その時だった...

【FINAL-ATTACK-RIDE】

【DE-DE-DE-DECODE!!】

突如音声と共に、10枚のライドカードが現れ、そしてそれらを貫きながら謎の人影がグロンギBにディメンションキックを放った。グロンギBは断末魔も上げずにそのまま爆砕していった...

「!?!?…ディケイドに似た…：仮面ライダー!?!」
「だ…誰!?!」

突然の乱入者に、ディケイドは驚き、クウガは戸惑う。

その仮面ライダーは、姿形はディケイドと全く同じであるが、色はディケイドのマゼンタに対して緑であり、複眼部分の色は緑に対し、蒼い色をしていた…

すると、そのライダーは二人の方を向き、声を発した。

「のび太さん、大丈夫ですか? しんのすけも!」

「お? その声…：風間くん?」

「え!?!」

なんと、謎のライダーの正体は風間だったのだ!

「ほほ…いい! 凄いゾ風間くん! 風間くんもライダーになったんだね! ……でもどうして?」

「うん、ちょっとな」

「なんて名前なの?」

「これか? これは『仮面ライダーディコード』って言うんだってさ」
「ふ…ん」

風間が手に入れた力、『仮面ライダーディコード』の姿を見て、はしゃぐしんのすけ…しかし…

「……………」

「…のび太さん?」

「……風間くん……君も……ディケイドと同じかっ!」

「…え!?!」

そうクウガが叫ぶと、ディコードにまで攻撃を仕掛けて来た。

「おわあ!?!」

「うわっ!?!……そんな!のび太さん、誤解です!?!」

「黙れッ!?!」

「風間くん!やるしかないゾ!」

「でも……っ!?!」

そして、激昂したクウガによりディケイド&ディコードVSクウガの戦いが始まってしまおうとしていた…

その時…!

—ブアアアアッ—

突如しんのすけの世界でも現れたオーロラが出現し、三人は戸惑う。

「!?!これは……!?!」

「あの……オーロラ!?!」

「な、なんだ……これ!?!」

三人がそう言っていると、オーロラの中から二つの人影が現れた…

「ねえ、ネル…ライダーがいるわよ…」

「そうだね、ハク…」

中から現れた人影は、二人共女性であった…

『ハク』と呼ばれた方は、髪の色が灰色でその髪を後ろで束ねており、上着はシャツの様だが袖は無く、更に灰色のネクタイを巻いていた。そして腕には黒いキーボードを模した布を着け、ズボンは長

いデニムを履いていた。年頃は20代半ばだろうか。

そして『ネル』と呼ばれた方は、黄色い髪を持ちその髪を左のサイドテールであった。上着はネクタイの色が黄色である以外はハクと同じであるが、こちらはハクとは違いミニスカートを履き、靴はスカートの丈近くまであるロングブーツだった。こちらの年頃は、17、8歳位だろうか。

「お…お姉さん達…誰!？」

「あ…ありのまま今起きた事を話すぜ! 『僕らの世界を滅ぼしたあのオーロラから今度は美しい女性が現れた』何を言ってるのかわからぬ!と思うが、僕も何が起きたのかわからなかった…頭がどうか(r y)」

「か、風間くん!? カムバークツ!？」

突然の現象に、ディケイドは驚き、ディコードは驚きのあまりポルナレフ化し、クウガはディコードのポルナレフ化に驚いた…ハクとネルはそんなことにお構い無しに喋り続ける…

「ライダーは、倒さないとね…ネル…」

「そうだねハク…こいつらに、『地獄』を見せてやろうよ…!」

二人がそう言うや否や、何処からか緑と黒のバッタ…二つのホップーゼクターがやってきて、二人の手元に納まる。

二人の腰にはいつの間にかベルトが巻かれており、二人はバックル部分を開くと、静かに叫んだ…

「「…変身」」

そして二人はゼクターをベルトにセットした…

【HENSHIN】

すると二人は姿を変え、そして二人は緑の仮面ライダーキックホッパー、黒の仮面ライダーパンチホッパーへと変身した。

そして今、静かな激闘が始まろうとしていた……！！

―神社の石段―

そこには、ディケイド達の様子を伺う男性が立っていた…

「…なんて事だ…！彼女達は、洗脳されている……！」

その男性はそう呟き、忌々しげにその様子を眺めている

「無事でいてくれ……ディケイド……いや、しんのすけ君……！」

この男性の正体は？「洗脳されている」という言葉の意味は？突如現れた二人の仮面ライダーとの、勝負の行方は？

クウガの世界だゾ【ドラえもん】後編（後書き）

次回の、クレヨンしんちゃん嵐を呼ぶ仮面ライダーディケイドは！

【KAMEN-RIDE】

【GATTACK!】

「…のび太君…戦って…」

「僕が戦わないと、あの人が笑ってくれない！」

「通りすがりの仮面ライダーだ…覚えておけ！」

次回 超絶

全てを破壊し、全てを繋げ！

番外編 D E C O D E 誕生（前書き）

今回は番外編です。

謎の青年と風間くんのやりとりをお楽しみください。

番外編 D E C O D E 誕生

「力が欲しいか？」

「えっ!？」

風間は突然の声に驚き、後ろを振り向くと黒のズボンとジャンパーに赤のシャツ、そして黒のコートを羽織り、その首にはカメラを下げた茶髪の青年が立っていた。

「ほらよ」

そして青年は、手に持った物を風間にほおり投げた。

風間はそれをキャッチし、そして見て驚く。

それはディケイドライバーと同じタイプのバックルであったのだ。

「!……これって…」

「そいつを…『仮面ライダーディコード』の力を使って、お前の仲間を支えてやれ。俺が言いたいのはそれだけだ」

「……あなたは…いったい？」

風間の問いに、青年はこう答えた。

「……通りすがりの仮面ライダーだ……覚えておけ………」

「………あなたも……!？」

風間は驚くが、青年は言う。

「それより、早く行ってやったらどうだ？」
「！」

言われて風間が振り向くと、ディケイドとクウガがグロンギに襲われていた。そう、今は仲間の手助けが先なのだ：

風間はしんのすけがするようにドライバーを腰に巻きハンドルを引いてバックルを展開し、そして一枚の『DECODE』と書かれたカードを取り出し叫んだ。

「変身！！」

そしてカードを装填し、バックルを閉じるとディケイドと同じ過程で変身する。

そして風間は『仮面ライダーディコード』に変身したのだ。

「……………ありがとうございます！！」

「……………ああ」

ディコードは青年に礼をして、そしてディケイド達の元へ向かった
……

青年はそれを見届け、そしていつの間にか青年の後ろに出現したオーロラに向かって歩き始める。

そして青年はオーロラの前で立ち止まり、静かに言った：

「……………頑張れよ……………風間くん……………」

青年はそれだけ言うとオーロラの中へ消えていった：

番外編 D E C O D E 誕生（後書き）

回収できるように頑張ります。（ゝ・ω・ゝ）

雑談会

デネキャン「どうも、まったく更新してないブロリーです…」

しんのすけ「いや、ブロリーじゃないじゃん。デネブキャンディーでしょ」

デネキャン「まあ、冗談は置いておき…本当に更新頻度が最低です、今回苦し紛れの投稿でちよつとした雑談です」

風間「本当になにしてんですか…」

デネキャン「いや、展開とかは出来上がってるんだよ」

しんのすけ「じゃ書いたらいいんだゾ」

デネキャン「でも書くの忘れてるっていうか…ああ、妄想で小説が書けたらなあ…」

しんのすけ「駄人間乙だゾ」

風間「展開とかはどうなるんでしょうか？」

デネキャン「ディケイドコンプリートが進化してたり、この小説のディケイドの強さが後半ハンパ無かったり…」

しんのすけ「つまり…どうゆうことだってばよ？」

デネキャン「ワザワザ口調変えなくていいから…コンプリートフォ

ームは、今ここに書くと誰かに盗られるかもだから書けません」

風間「盗られるって…」

デネキャン「後者はね、後半っていうか原作で言うところと完結編の所で、あれ大詰めでディケイド元に戻るじゃないですか、コンプリートも進化するし」

しんのすけ「確かにそうだゾ」

デネキャン「で、あのディケイドを強化しようと思うんです。せつかくの覚醒態ですから」

しんのすけ「進化したディケイド？」

デネキャン「まあ、今はまだどんな進化を遂げるかは言えませんがね。後、最強技とか出ます」

風間「随分あっさり言いましたね…具体的にはどんなです？」

デネキャン「今の処一番有力な案は、仲間が多い程威力が跳ね上がると言う…」

しんのすけ「一人ミナデイン乙だゾ」

風間「スターライトブレイカー乙です」

デネキャン「まあ、そうですね。ぶっちゃけ元気玉です……といった所で、そろそろお開きといきましょう」

風間「本当に説明とかで終わっちゃった…」

デネキャン「それでは皆さん、次はクウガ編後半にてお会いしましょう」

しんのすけ「どうせまた長引くくせに……」

デネキャン「お前の言う通りだあ……」

しんのすけ 「……………」

【KAME—RIDE】
【DECADE!】

デネキャン「え、ちよ……」

【FINAL-ATTACK-RIDE】
【D.D.D. DECADE!】

デネキャン「こらあ！ちよつとは手加減しろ！」

「デイクイド 手加減ってなんだあ？」

ドッ
ゴ
オ
オ
オ
ン
ッ
！！！！！！

デネキャン「ギョエエエエエエエエエ!?!?!?!?」

風間「お、お後がよろしいようで」（汗）

雑談会（後書き）

こんなばっかですみません……O r Z

超絶くねけなしの勇氣く その1（前書き）

長らくお待ちせしました！クウガ編後半のPart1です！

もう五ヶ月も話進んでないとかカタツムリ並の遅さですね（汗

そして今回はディコード初戦闘です！お楽しみに！

超絶くねけなしの勇気く その1

―神社―

そこに、ディケイドとディコードとクウガの三人、キックホッパーとパンチホッパーの二人が対峙していた…

「…………フツ！」

先に動いたのは、キックホッパー達だ。

抜群のチームワークで、ディケイド達を押していく。

「ぐ…っ！」

「っ、強い…!!！」

その時、その言葉にキックホッパーが反応した。

「…アンタ…今、ネルを笑ったわね…!!？」

「…へ？」

「何言って…」

ディケイド達には、なぜ怒っているのかわからず、疑問に思う。

「許さない……………!!！」

「え!?! おわっ!?!」

「うわ!?!」

突然キックホッパーが怒り、ディケイドとクウガに集中的に攻撃を仕掛けた。

「しんのすけ!のび太さん!」

「待ちなさい!アンタの相手はアタシだよ!」

「く…!」

そういつてパンチホッパーはデイコードに攻撃する。

「…っ!ならこれで!」

言いつつデイコードはライドブツカーから一枚のカードを取り出し、バックルへ装填した。

【KAMEN-RIDE】

【DARK-KABUTO!!】

電子音が鳴った瞬間にデイコードはたちまち姿を変え、カブトの世界の黒き太陽の神、『仮面ライダーダークカブト』に変身した。更にデイコードは自身に装着されているダークカブトの主要武器『ダーククナイガン』を装備し、パンチホッパーを斬りつける。

「ぐ…っ!」

不利と感じたパンチホッパーはすぐさまベルトの左側部を叩く。

【CLOCK UP】

そしてパンチホッパーは超空間に突入する。それを見たデイコードも、すかさずカードを装填した。

【ATTACK-RIDE】

【CLOCK UP】

するとディコードも超空間へと入り、そのままパンチホッパーと格闘が始まる。そんな中、ディコードは思った…

（…すごい…次に何をしたら良いか、瞬時に頭に浮かんでくる……これが…ディコードライバーの力…!!）

一方、ディケイドとクウガはキックホッパーと格闘を繰り広げていた。しかし2対1なのに関わらず、若干キックホッパーが押している様であった。

「笑え…もつと笑いなさいよ…!!」

「あのお姉さん…結構強いゾ…」

「く…っ!」

「…!!…また笑ったわね…!!」

「…また怒ったゾ…?」

「僕達、何も言っていないよねえ?…うわっ!!」

なんと今度はクウガが標的になり、クウガはキックホッパーに一方的に攻撃される。

しかし…

【ATTACK—RIDE】

【BLAST!!】

キックホッパーは背後から雨の様なエネルギー弾を食らう。

「うぐ…っ!!」

「オラを忘れるんじゃないゾ!!」

ディケイドの射撃でキックホッパーが仰け反り、クウガは攻撃から解放される。

「しんちゃん、ありがとう！ハアッ！！」
「ガッ！？」

チャンスを逃すまいとクウガはすかさず、キックホッパーを蹴り上げ自身から離れさせる。

その時ちょうど超空間から出てきたディコード、パンチホッパーが合流しお互い向き合うが…

「…お？」
「あのオーロラ！？」
「！！」

互いの間に、突如歪みのオーロラが出現した。

「……ここまで、か…行こう、ネル…」
「うん…次の地獄が待ってる…」

変身を解除しながら二人はそう言い残し、オーロラの中へと消えていった…

一方その片隅の石段で、一人の男性がその光景を見ていた…そして男性は言った。

「……しんのすけ君……無事で、良かった……！」

そして男性はそのままどこかへと去っていったのだった…

更にもう一方の神社の陰で一人のオレンジの髪のツインテールの少女が立っていた…

そして少女は、つぶやいた…

「…ディケイド……これが始まりだよ……!!」

少女はそう言うと、どこかへと去っていった…

超絶くなけなしの勇氣く その1（後書き）

あの謎の少女は一体……!？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9571h/>

クレヨンしんちゃん 超次元！嵐を呼ぶ仮面ライダーディケイド

2011年2月15日20時28分発行